読む医療 専門医が語る現代病気事情

胆嚢がん早期発見 超音波検査が重要

端子を当てるだけの手軽な検査

取りきれるなら摘出し早期では90％以上が治癒

胆嚢は、肝臓と十二指腸をつなぐ胆管の一部に小さな茄子のような形で存在する臓器です。肝臓で作られた胆汁を貯留し、食後に胆汁を輩出して消化を助けます。胆嚢がんとはここにできるがんです。罹患率は決して高くありませんが、死亡率の高いがんなので気を付けなければなりません。特に、女性にやや高い傾向があります。

疫学的には、膵胆管合流異常症などの胆道系疾患の既往が胆嚢がんのリスク要因として知られています。また、胆嚢の摘出術を行うことが、胆嚢がんのリスクを低下させるという報告もあります。胆嚢がん自体による特徴的な症状はありません。胆石を合併することが多いため、胆嚢炎による腹痛や発熱などの症状を契機に見つかることがあります。最近では、人間ドックなどの超音波検査で、胆嚢腫瘍が疑われることが多々あります。その中で、実際には胆嚢癌であることは稀で、胆石、ポリープ、胆嚢腺筋症など良性疾患であることがほとんどですが、専門医のもとで確実な診断を受けることが重要です。一方、がんが進行し、胆汁の流れる胆道を閉塞すると黄疸が出現してきます。

検査の第一歩はなんといっても超音波検査です。横になって腹部にゼリーを塗り、検査端子をあてるだけで、痛くもなく、胆嚢、肝臓などがモニターに描出される簡単な検査です。胆嚢に異常が指摘された場合は、CTやMRIなどの精密検査が行われます。胆嚢がんの場合、胆嚢の壁が肥厚してみえる他、周辺臓器への浸潤、リンパ節転移、肝転移などの有無を診断します。これに対し、血液検査では、よほど進行しなければ胆嚢がんを診断するのはほぼ不可能です。

原則的に癌を残さず取りきれると判断される場合には摘出手術が行われ、早期であれば90％以上が治癒します。胆嚢がんの場合は超音波という簡便なスクリーニング法があるので、症状がない段階で気軽に定期的に検査を受けるのがポイントでしょう。

◇執筆者紹介＝宮下正夫／日本医科大学消化器外科教授／日本医科大学千葉北総病院外科部長　医学博士／日本消化器外科学会指導医／日本消化器病学会指導医／日本がん治療認定医機構認定医／日本消化管学会胃腸科指導医。